知ってるようで知らない「イルカ」のこと

運が良ければ五和の海岸沿いからイルカの姿を見ることができる天草。「イルカに会える島」とも言われ、年間10万人を超える観光客がイルカウォッチングを楽しんでいます。

皆さんはイルカに会ったことありますか？

今号では、天草に住むもうひとりの住人〝イルカ〟について紹介します。

■天草に住んでいるワケ

島原半島と天草諸島に挟まれた五和沖は、「早崎瀬戸」と呼ばれ、流れが速い海域です。この速い潮流と起伏に富んだ海底によって、この地域は魚類の宝庫とも呼ばれ沿岸地域の漁業を支えてきました。

・この地域の漁業が一本釣りと素潜り漁を主としていた

・漁獲高とイルカの食べる量のバランスがよかった

・イルカを襲う種類のサメなどがいなかった

・イルカを食べる文化がなかった

などの理由からこの地にイルカが定住・定着していると言われています。

■イルカウォッチングの歴史

五和町でイルカウォッチングが始まったのは平成5年から。出港して5～10分ほどでイルカに会えるとあって人気を呼び、観光の目玉となりました。

観光客の増加に伴い、業者も急増。多いときには30隻もの船がイルカの群れを追いかける状況になり、イルカの生態系や素潜り漁業者とのトラブル、漁船との事故などの課題も見られるようになりました。平成12年に県境を超えて6市町の関係団体が集まりイルカウォッチング連絡会議を発足。それまでの各地域のルールを改め、新たに12のルールを定めました。

■イルカとの共存を目指して

・イルカの食餌（しょくじ）や交尾・出産など自然な行動を妨げません

・野生のイルカに餌付けはしません

・イルカの群れから200m以内の航行は減速します

・ウォッチング中の船とイルカの群れとの距離は、群れのほうから船に接近するときを除いて30m以上の距離をおいて操縦します

・イルカと並走し、減速して操縦します

・イルカの群れに突っ込まない、群れを追いかけません

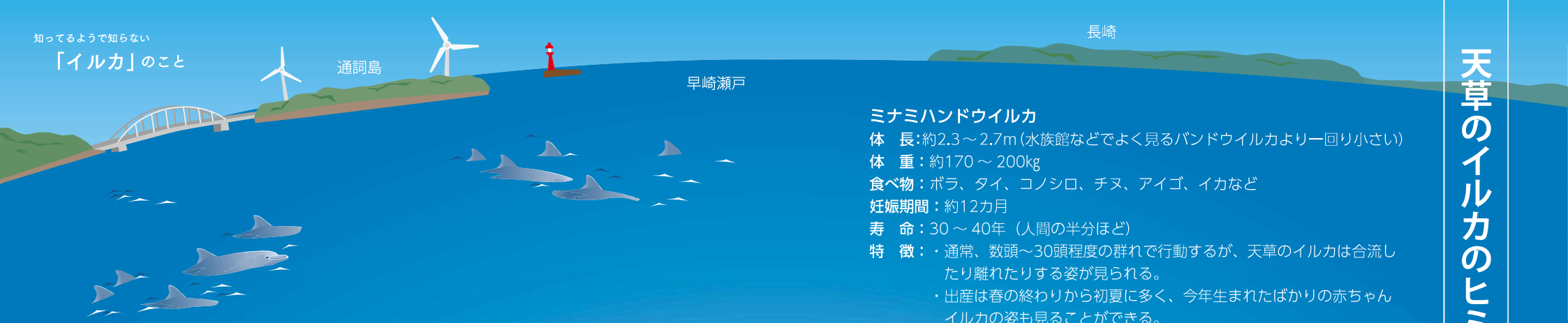
（ウォッチングの自主ルール抜粋）

事業者や漁業者は、このルールに従ってイルカとの共存・共生に取り組んでいます。

イルカウォッチングを体験するときは、これらのルールを理解してイルカが暮らすテリトリーに「お邪魔します」という気持ちで会いにいきましょう。

写真提供：中野誠志さん（高浜沖にて）

天草のイルカのヒミツ



ミナミハンドウイルカ

体　長：約2.3～2.7m（水族館などでよく見るバンドウイルカより一回り小さい）
体　重：約170～200kg
食べ物：ボラ、タイ、コノシロ、チヌ、アイゴ、イカなど
妊娠期間：約12カ月
寿　命：30～40年（人間の半分ほど）
特　徴：・通常、数頭～30頭程度の群れで行動するが、天草のイルカは合流したり離れたりする姿が見られる。
・出産は春の終わりから初夏に多く、今年生まれたばかりの赤ちゃんイルカの姿も見ることができる。

■ドルフィンリング
まれに水中で鼻から空気を吐き出すときがあります。条件がそろえば空気が輪になって水面に上がってきます。

■呼吸
頭の上に空いている穴はイルカの「鼻」。プシューっと空気を吐いて一瞬で空気を吸い込み呼吸をします。

■背びれ
個体の識別は、背びれで行います。ひれの角度やひれの切れ込み、傷を利用して１頭１頭見分けます。

■潜水のサイン
尾びれがはっきり見えたときは潜水の直前。垂直に近い角度で潜っていきます。長くて20分ほど潜ることもあります。

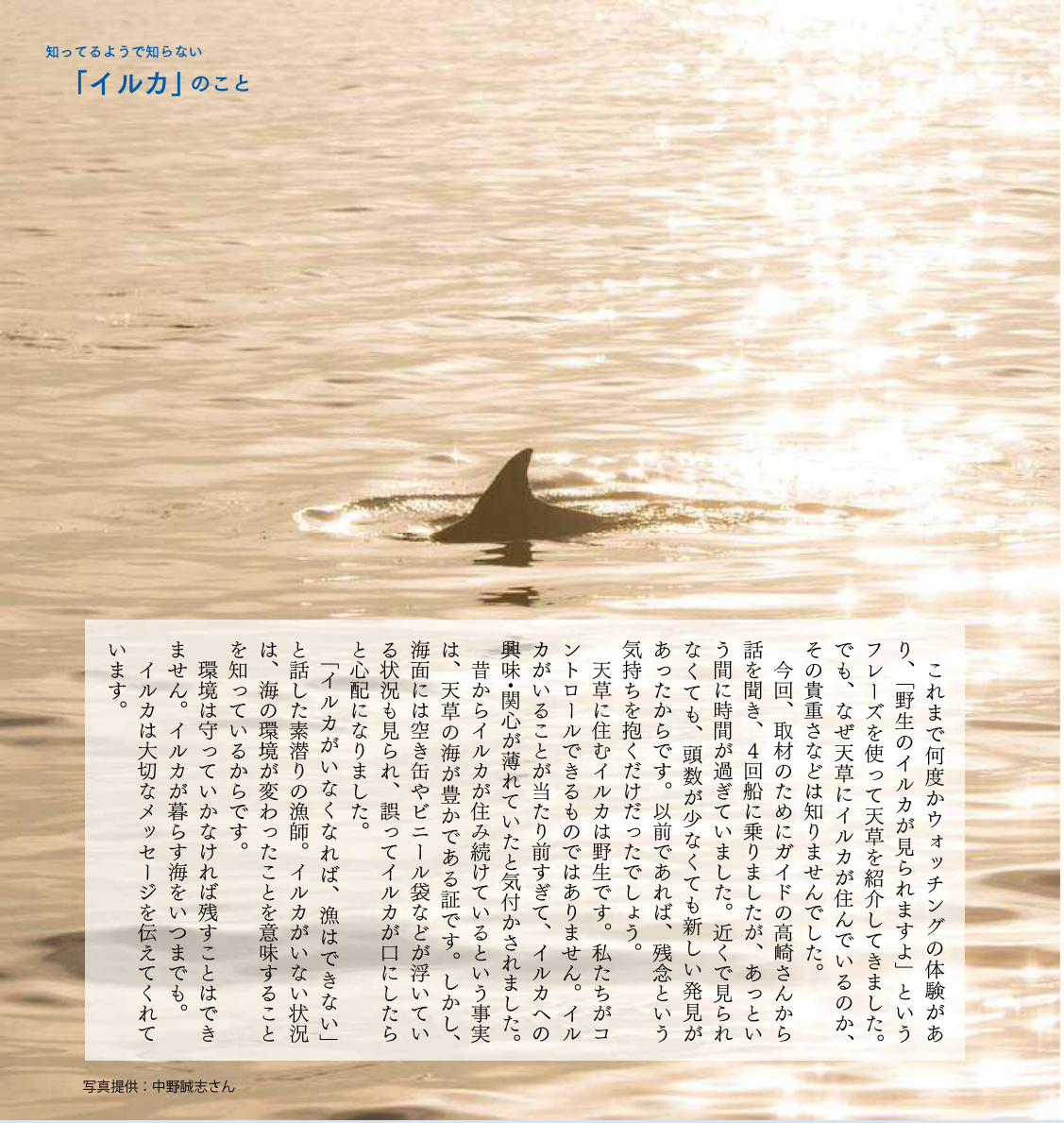
■食事
餌は噛まずに丸飲み。魚をくわえている姿を見られたあなたはラッキーかも。

■イルカの泳ぎ
ゆっくり泳いでみたり、船首の前を泳いでみたりといろんな姿を見せてくれるイルカ。普段は時速20キロほどですが、40キロで泳ぐことも。

■人に興味津々のイルカ
潜って漁をしていると、キーキーとイルカの声が聞こえてきます。近寄って来たり、目が合ったりすることもありますが、攻撃してくることはありません。

▲漁に出る前の素潜り漁師たち

■ジャンプ
ミナミハンドウイルカはあまり跳ねたりしませんが、天草ではジャンプする姿が見られます。１度ジャンプすると２～３回続けるのでシャッターチャンスです。



イルカの聖地が天草にあった！

イルカガイド
高崎ひろみさん

「イルカはどれくらい潜っているの？」「寝たりするの？」「いつも会えるの？」

観光客からの質問に笑顔で答える高崎さん。東京都出身の彼女は、2017年の4月から天草に住みイルカウォッチングのガイドをしている。

自分のことを「イルカバカ」というほどイルカが大好きで、天草のイルカたち数頭に名前をつけて呼んでいる。

高校生のときにフロリダでイルカについて学ぶ1週間のキャンプに参加。その体験により、さらにイルカへの興味関心を高めた高崎さんは、バハマやオーストラリアなどを訪れイルカに会ってきた。そんな彼女が「ここはありえない、すごすぎる」と叫ぶほど、天草はすごい場所だという。

イルカやクジラなどは餌を求めて広い海を回遊する。そのイルカが一定の場所にしかも内海に定住しているのは世界的にもめずらしい。しかも天草はかなり狭い範囲で確認でき、遭遇率も9割程度。陸からも近く、人々のすぐ側にイルカが暮らしている状況は奇跡に近く、天草がイルカの楽園であることを示しているという。

「イルカたちのパワーに衝撃を受けました」と3年前、初めて天草に来てイルカに会った日のことを彼女はこう振り返ります。

イルカは見て終わりではなく、自然や人々の営み、地球や生態系についても学ぶことができる。「フロリダでは飼育されたイルカだったが、ここは野生のイルカ。学んだことを直に確認できる貴重な場所」と語る彼女の夢は、自分が体験したイルカキャンプを日本で開催すること。

「イルカの聖地・天草」で夢を叶えるために動き出している。

ガイド中の高崎さん

これまで何度かウォッチングの体験があり、「野生のイルカが見られますよ」というフレーズを使って天草を紹介してきました。でも、なぜ天草にイルカが住んでいるのか、その貴重さなどは知りませんでした。

今回、取材のためにガイドの高崎さんから話を聞き、4回船に乗りましたが、あっという間に時間が過ぎていました。近くで見られなくても、頭数が少なくても新しい発見があったからです。以前であれば、残念という気持ちを抱くだけだったでしょう。

天草に住むイルカは野生です。私たちがコントロールできるものではありません。イルカがいることが当たり前すぎて、イルカへの興味・関心が薄れていたと気付かされました。

昔からイルカが住み続けているという事実は、天草の海が豊かである証です。しかし、海面には空き缶やビニール袋などが浮いている状況も見られ、誤ってイルカが口にしたらと心配になりました。

「イルカがいなくなれば、漁はできない」と話した素潜りの漁師。イルカがいない状況は、海の環境が変わったことを意味することを知っているからです。

環境は守っていかなければ残すことはできません。イルカが暮らす海をいつまでも。

イルカは大切なメッセージを伝えてくれています。

写真提供：中野誠志さん

イルカの拠点施設を整備

～イルカと共存していくために～

【施設の概要】

地上２階建て（延べ床面積1,656.94㎡）

１階：イルカウォッチング受付、観光案内スペース、物産販売スペースなど

２階：レストラン、展示・学習スペース、展望デッキなど

▲天草市イルカセンター（仮称）完成予想図

天草の海は、漁業者を中心とする地元住民とイルカが共存してきました。豊かな海の環境やイルカと人々の関係をこれからも大事に守り続けながら、天草を代表する体験型観光のイルカウォッチングの充実に向け、天草市イルカセンター（仮称）を整備し、平成31年４月の開館を目指しています。

■自然環境への理解を深める場

・通詞島沖の海の特徴やイルカの生態など、豊かな自然環境を学ぶ。

・イルカと漁業者が共存してきた歴史や文化についての理解を深める。

■観光客の利便性の向上

・受け入れ窓口の一本化、総合的な受け入れ態勢の整備。

・天草の他の観光スポットを案内（⇓周遊につながり天草の滞在時間が増加）。

■地域振興

・地元の水産物や加工品の販売、食事などの提供で水産振興と産業の振興を図る。

問本庁・観光振興課（天草宝島国際交流会館ポルト内）☎②③1111